

不可欠である。事後の対処に終始せず、予防のためにも、既存の制度を有効に活用することが第一歩なのではなからうか。

(望月 克哉)

ケニア ◎ アフリカ象保護積極化への道程

絶滅の恐れのある動物としてアフリカ象がクローズアップされ、一九八九年十月に開催されたワシントン条約締結国会議は、象牙などの国際取引を全面禁止する決定を行った。ケニアは、密猟者から没収した二〇〇〇本とも二五〇〇本ともいわれる象牙一二トン、約三〇〇万ドル相当を同年七月に焼却処分にし、アフリカ象保護の主導国の一つと目されている。

しかし、このような積極的なアフリカ象保護に転換するまでには紆余曲折があった。ケニアにとってアフリカ象保護は、単に環境問題にとどまらないためである。

●密猟が象激減の主原因

ダグラス・ハミルトン博士の推計によれば、ケニアでは一九七三年に一三万頭以上いたアフリ

カ象が、八七年には一万八〇〇〇頭に激減している。このアフリカ象減少は、八〇年代の大半が主因であるという。同国は、最大の輸出品目であるコーヒー以上に観光業から外貨を稼得しており、アフリカ象の絶滅は観光資源の縮小を意味する。また隣国のソマリアから資金・武器供与を受けて近代銃器で武装しているといわれる密猟者の暗躍は、観光客の足を遠のさせることにもなりかねない。

この意味で、アフリカ象の保護は、経済問題であり、治安問題であり、そして外交問題でもある。さらに、エスニックな問題にも、政争の種にもなる。むしろ、環境問題以外の要因が、ケニアのアフリカ象保護の路線を左右する。

●アフリカ象保護論争の展開

ケニアでアフリカ象保護の議論が盛り上がってきたのは、一九八八年九月であった。当時ケニア博物館総館長の要職にあったR・リーキー博士は、野生生物保護の民間団体、東アフリカ野生生物協会会長という立場で、観光・野生生物省の野生生物保護の杜撰さを非難し、同省の役人中に密猟に荷担している者がいると、記者会見で明らかにした。自らも著名な古生物学者である同博士は、東アフリカで化石人類を発掘したL・リーキー博士夫妻の長男であり、同家は彼の祖父の代からのケニアに居住する白人名門一家である。

この発言に対して、観光・野生生物大臣は、自然保護に関心をもってするのは自分たちだけだ

と考えるのは白人の思い上がりであると、やや感情的な反論を展開した。同省では、ワシントン条約推進者の一人であり野生生物保護論者として著名なオリン博士をすでに一九八八年に野生生物保護・管理局長に据え、また八九年一月には職務遂行に疑義のある複数の同局高官を更迭しており、同大臣としては自分たちの努力を認めない発言ととつたためであろう。ちなみに、観光・野生生物省の当時の二人の副大臣の一人は奇しくもR・リーキー博士の弟P・リーキー氏であったが、同氏の見解は報じられていない。

両者の論争は、モイ大統領が密猟現行犯をその場で射殺することを許可したため、リーキー博士等の強行論者がポイントをあげた形でひとまず終止符が打たれた。

この大統領命令以後、密猟団が凶暴化し、観光・野生生物省はアフリカ象保護でさらに苦境に立たされ、その無能ぶりが以前にもまして非難されるようになったのである。密猟者取締りの援軍として派遣された警察隊が密猟団との銃撃戦で死傷者を出したことから、密猟に対する国民の関心が一挙に高まった。密猟団の背後にはソマリアがいると取り沙汰されたが、ソマリア系ケニア人が住民の多数を占める北東州から選出されていた国会議員たちは、いち早くソマリアを非難することで、ケニアに対する忠誠を表明した。この時期に、アフリカ象保護の実務担当最高責任者のオリン博士が、世界中の野生生物保護活動家の最高荣誉とされるJ・ポール・ゲッティ野生物保護賞の同年の授賞者に決定したのは、皮肉といわざるをえない。

一方、アフリカ象保護論争の勝者であるリーキー博士に対しては、その本業である博物館総館長の職務遂行について、外国人研究者との研究を優先している等の人種主義を背景とした中傷が

なされ、文化関係担当大臣を兼任していたカラランジャ副大統領は、博物館業務を監査する委員会の委員を任期途中で入れ替え、リーキー博士に批判的といわれる人物を委員長に据えた。嫌気のさしたリーキー博士は二〇年以上在任した総館長職を辞職してしまった。

●野生象保護積極化へ

事態が一転したのは、一九八九年の四月である。リーキー博士が、野生生物保護・管理局長に任命された。高級官僚の人事は大統領が担当大臣の進言に基づいて行うのが慣例であり、観光・野生生物大臣の推挙とは思われない今回の任命は異例のことである。ケニヤ最大の人口を擁するエスニック・グループのキクユ出身者で、一九八六年の補選で初当選しわずか二年で副大統領に上り詰めたカラランジャ氏は、政治家としての未熟さをたちまち露呈し、政治スキャンダルに巻き込まれ、一九八九年五月の内閣改造で失脚した。同じくキクユ出身で彼に近い位置にいた観光・野生生物大臣も調査・科学技術大臣に転任となり、その政治力は激減したと評されている。この背景には、独立以来ケニヤ政財界を牛耳ってきたキクユの追い落としを凶るモイ大統領の意図がみえかくれする。野生生物保護に従来以上の財政支出を行う余裕がなく、今後は内外の資金に依存したトラスト方式での保護を検討しつつあるケニヤ政府は、白人であるR・リーキー博士の欧米での知名度による資金収集に期待を込めていることも事実である。

ともあれ、こと環境保護の点では、強行推進派のリーキー博士の起用により、アフリカ象保護は積極的に推進されることとなった。就任当初、リーキー博士は密猟団から押収した象牙の売却

益を野生生物保護対策に充当する構想を発表していた。しかしながら、新任の観光・野生生物大臣が一九八九年十月のワシントン条約締結国会議でアフリカ象の象牙取引の全面禁止を主張すると五月に公表した直後に、象牙の競売が実施されたために、真意を疑うと野生生物保護論者から相次いで非難されることになった。その対応として、象牙焼却の「儀式」が催されたのである。アフリカ象保護の主導権を握ることによって、幻の象牙収入に数倍する野生生物保護財源を国外から確保しようとの読みがあったといわれる。

象牙焼却を一樣に賞賛するケニヤの政治家、高級官僚のインタビュー記事に、かえってケニヤ政治の不安定さを感じるのには杞憂であろうか。

(池野 旬)

コートジボワール ◎ 害なわれた潟湖の景観

西アフリカのギニア湾の海岸線は、ラギューン(潟湖)が入りくんでいることがその特徴である。このギニア湾に面したコートジボワールの経済的主都アビジャンも、このラギューンが入りくみ、水の都といった美しい景観をこの都市に与えている。植民地時代の末期、一九五〇年にウ